

Title	世論とイノベーション (1) デジタル時代の科学技術と経済
Author(s)	木村, めぐみ; 田口, 久美; 植木, 貴之; 金, 柄式; 野中, 孝浩; 上田, 宏幸; 長谷川, 大地
Citation	年次学術大会講演要旨集, 35: 805-807
Issue Date	2020-10-31
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10119/17452">http://hdl.handle.net/10119/17452</a>
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

○木村めぐみ, 田口久美, 植木貴之, 金柄式, 野中孝浩, 上田宏幸, 長谷川大地 (一橋大学)

## 1. はじめに

本稿の目的は、自然科学と社会科学の歴史的関係性を通じて、時代が提起する問題、つまり、創造の機会を発見する合理的かつ効率的な方法について検討することである。

近年、SDGs や Responsible Research and Innovation といった目標や、知識経済、倫理経済、共同経済、創造経済、デジタル経済といった新しい経済の出現を指摘する動きが活発化している。しかし、こうした表現は、社会科学がその役割を十分に果たすことができていないことを知らせる動きともいえる。その起源をアダム・スミス[1723-1790]の仕事に認める時、社会科学は、科学と社会をつなぐ役割を運命付けられてきた。彼は、「長い間相互に無関係であった二つの思想群」を新しく結合したが、その思想群とは、「偉大な科学の母たる哲学から生まれた」思想群と、「実際の時事問題に対する各種のタイプの人々の関心を動力として積み重ねられた」思想群 (Schumpeter 1914) である。実際に、自然科学との比較を通じて社会科学内部の問題を指摘する人々は少なくなく、イノベーションの研究も、とりわけ生物学の用語を安易かつ伸縮自在に扱ってきたことや、歴史研究と理論研究の乖離への批判から、新しい社会科学に向けた提案として始まった経緯がある (Tarde 1890, Schumpeter 1912, 1942)。しかしながら、現在に至るまで、この問題は解決されたとは言い難い。

現実的には、情報技術の普及により、多様な人々が、多様な目的を持って参加する活動が増えてきている。しかし、ユニバーサルに進むこうした動きに対して、政治や経済、社会が同じように、つまり、予想、あるいは期待された通りに進むとは限らない。そのギャップが意識されることによって表現されてきた社会的課題の多くも、当然ながらスミスの時代のスコットランドとは大きく異なっている。最近では、デザイナーがこうした科学と社会の間に生じたギャップを解決する役割を果たそうとしている (Brown 2010 など)。しかし、社会科学やイノベーション研究の起源へと遡ってみると、社会科学の個別領域を結び合わせることによって、より効率的かつ合理的な方法を開発できる可能性もある。

そのため、本稿では、自然科学と社会科学との間に生じたギャップを可視化することによって、時代が提起する問題、つまり、創造の機会を発見する合理的かつ効率的な方法について検討する。

## 2. 世論とイノベーション

近年、道徳感情か経済発展かというような奇妙で、無意味で、非生産的な論争が増えてきている。

アダム・スミス (1759) によると、「いかに利己的であるように見えようと、人間本性のなかには、他人の運命に関心を持ち、他人の幸福をかけたがえのない推進力が含まれている」。しかし、「この道徳感情に多大な影響を及ぼすだけでなく、非難すべきものは何であり、賞賛すべきものは何かをめぐって、異なった時代や国で広まっている、多くの変則的で不協和な世論を作り上げていく主要な原因としての原動力」は、慣習と流行であり、これらは「あらゆる種類の美に関わる我々の判断にまでその支配権を拡張している原動力に他ならない」という。つまり、道徳感情とはイノベーションを推進する力、慣習と流行は、イノベーションを阻害する力とも言える。しかし、それから 250 年以上の時を経ても、彼のいう「推進力」「慣習」や「流行」と、その関係性の議論が進んでいるとは言えない。

この3つの力についての議論を進めるには、世論研究が進まなければならなかったともいえる。しかし、Lippmann (1922) がいうように、「政治や政党に関しては、つまり、世論が形成されたのちに理論上これを表現するはずの仕組みに関しては優れた書物がある。ところが、そうした世論がどのような源に発し、どのような過程を踏んで導き出されてきたかについてはほとんど書かれていない」。実際に、世論という用語それ自体に特定のステレオタイプが付き纏っている。

世論研究の多くは、その内容が注目され、社会運動と結びつけられてきた。しかし、再び Lippmann (1922)がいうように、「世論は、間接的な、目に見えない、訳のわからない諸事実を取り扱うものであり、それらに関して一目瞭然のものなど何もない。世論が言及する対象になる諸状況は、意見というかたちでしか知らされない。」つまり、いくら世論の内容を分析しても、事実を発見できるとは限らない。なお、彼の世論の定義は、「頭の中に思い描く自分自身、他人、自分自身の欲求、目的、関係のイメージ」であり、「人の集団によって、あるいは集団の名の下に活動する個人が頭の中に描くイメージ」であって、一般的な意味での世論とも大きく異なる。

しかし、その後の世論研究やメディアの多様化、パーソナル化により、「他人の運命に関心を持ち、他人の幸福をかけたがえのない推進力」「慣習」「流行」とその関係性や変化の観察や分析も十分に可能であると考えられる。

### 3. デジタル時代の科学技術と経済

その議論を妨げてきたのは「19 世紀パラダイム」である。Wallerstein (1991)は『脱＝社会科学：19 世紀パラダイムの限界』において、次のように言っている。「19 世紀社会科学の最も長続きしている（そして人を惑わせている）遺産—経済的なもの、政治的なもの、社会—文化的なものという三つの領域、三つの論理、三つの水準に社会分析を分割してしまうことを乗り越える道を見出しえないでいる。私のみるところ、その言説や含意のいくらかは正しいが、その大部分がおそらく正しくないのに、である。この三位一体が頑なに道の真ん中に立ち塞がっており、われわれの知的前進をはばんでいる」。

この指摘が行なわれたのはまだ、コンピューターやインターネットが普及する前である。それから 30 年が経とうとしている現在でもなお、この 19 世紀パラダイムは、もはやステレオタイプや神話のように機能している。もちろん、現在までの間には、政策、メディア、地域研究などのような学際領域も誕生した。しかし、それでもまだ、社会科学が 19 世紀までに創られた伝統を乗り越えることができたとは言えない。Hobsbaum (1983)が次のように述べていたように、伝統について論じるには学際研究が不可欠である。「伝統の創出の研究は個別の学問領域を超えるものである。この分野は歴史家と社会人類学、そして他の人間科学の研究者を結びつけるもので、違いの協力なしでは適切な探求はなされないだろう」。しかし、このような動きが 1960 年代から 1990 年代までに起きた歴史研究では、社会科学の個別領域を結び合わせた新しいパラダイムの必要性が明らかになっている (Cannadine 1988, 2001 など)。

社会科学の個別領域を歴史的に結び合わせることによって始まったがイノベーションの研究であった。すでに、一世紀以上も前に、ガブリエル・タルド[1843-1904]やヨーゼフ・シュンペーター[1883-1950]は、社会科学内部の問題を提起し、新しい社会科学としてイノベーションの研究を始めていたのである。今のところ、彼らが提示していた、イノベーション特有の研究方法で行われた研究はほとんど見当たらないが、増大する情報量は、これらの情報それ自体よりも、情報を認識させる意味に着目した方法を用いた研究を促進させることになると考えられる。

### 4. 経済活動としての思考

初期のイノベーション研究のアプローチは、社会学と経済学それぞれの文化を反映しており、その着眼点等も大きく異なっている。しかし、注目に値するのは、彼らの研究がニュートン以後の物理学や、ダーウィン以後の生物学のアイデアを導入していたという点である。

19 世紀パラダイムとはほとんど、生産活動や社会の近代化を「運動」、つまり自然過程と見なすことによって創られた伝統である。ニュートン以前と以後の「運動」概念の変化を参照してみるまでもなく、科学辞典を開くと、生産活動を 19 世紀の自然哲学の意味合いで扱いつづけることそれ自体が限界の源にあることが確認できる。「物体、あるいは対象系の位置が時間とともに変化すること、観察者が特別の参照枠内で観察する必要がある。相対的な運動のみ測定可能であり、絶対的な運動というのは無意味である」(オックスフォード科学辞典 2017)。物理学の歴史において、観察者の時間の捉え方が変化の要となっていたことはよく知られているが、経済学における理論と歴史の分断については、シュンペーター (1946)も指摘していた。例えば、1946 年に行われた経済史学会において、アーサー・H・コールの、「理論的タイプの経済分析は、経済的変化の現象を終始無視してきた」という告発について、いくら強調してもしすぎることはないとして述べている。たしかに、今日までの間に、歴史研究と経済学の間にはさらに大きなギャップが生まれているが、そのことがこの二つの文化の再結合を妨げる理由にはならない。

というのは、「19世紀パラダイム」はまだ、科学や芸術のような精神活動と、経済活動の間に大きな距離あるいは時差があった時代に創られたものだったからである。それより前のスミスの時代には、次のように考えられていた。「数学者や自然哲学者は世論から独立しているため、自分自身の名声を維持し、競争相手を意気消沈させるために、党派や派閥を結成しようという誘惑を持つことがほとんどない...」(Smith 1759)。そのため、Mach (1882) がいうような経済活動としての思考をめぐる研究は、ほとんど行われてこなかった。「常に思考を節約すること、そして経済的に秩序づけられた何千何万という人々の経験を一個人の頭脳に集積すること、これによってのみ、時間と能力とに限りのある人間が知という名に値するものを手中に治めることができるのです」。

むしろ、新しいパラダイムを形成するような業績を生み出した人々は、神格化された才能として扱われ、天才というような用語で片付けられてきた経緯がある。その理由もまた、社会科学が「偉大な科学の母たる哲学から生まれた」思想群の方を更新してこなかったことによって説明することができる。しかし、知識経済が「伝統的な生産手段ではなく、情報の効果的な獲得、普及および利用に依存していると考えられる経済」(Oxford English Dictionary)であるなら、こうして生じている限界や矛盾を乗り越えない理由もないはずである。

## 5. 終わりに

本稿では、自然科学と社会科学の歴史的関係性を通じて、時代が提起する問題、つまり、創造の機会を発見する合理的かつ効率的な方法について検討した。情報を資源とする経済活動では、これまでに生じていた政治的判断や経済的判断にある時差を明らかにすることによって、それぞれの判断材料となるような要素を全て考慮に入れたフレームワークの作成が不可欠である (Pratt 2005)。しかし、こうした複雑な活動を支える理論を構築するには、まず、社会科学に導入された自然哲学の思想を今日までの科学の発展に合わせて更新すること、世論の分析を通じて「推進力」「慣習」「流行」と、その関係性、さらに、その変化のメカニズムを明らかにすることになる。

## 参考文献

- [1] Brown, T. (2010). *Change by Design: How Design Thinking Transforms Organizations and Inspires Innovation*. (千葉敏生訳『デザイン思考が世界を変える』ハヤカワ・ノンフィクション文庫)。
- [2] Cannadine, D.(1988) *Class in Britain*, New Haven, CT. Yale University Press. (平田雅博、吉田正広訳『イギリスの階級社会』日本経済評論社、2008年)。
- [3] Hobsbawm, E. (1983) “Inventing Tradition” in *The invention of Tradition*. Ed. Hobsbawm, E. and Ranger, T. Cambridge, UK. Press of the University of Cambridge. (前川啓治訳「序論-伝統は創り出される」『創られた伝統』紀伊国屋書店、1992年)。
- [4] Lippmann, W. (1922). *Public Opinion*, Harcourt, New York, NY. Brace & Co. (掛川トミ子訳『世論』岩波文庫、1987)。
- [5] Mach.E. (1882). “The Economical Nature of Physical Inquiry.” *Popular Scientific Lectures*. Chicago, IL. The Open Court Publishing CO.
- [6] Pratt, A. (2005). *Cultural Industries and Public Policies*. *International Journal of Cultural Policy* 11(1):31-44.
- [7] Schumpeter, J. A. (1942, 1947, 1950). *Capitalism, Socialism and Democracy*. (大野一訳、「創造的破壊のプロセス」『資本主義、社会主義、民主主義 I/II』日経 BP 社、2016年)。
- [8] Schumpeter, J.A. (1946, 2001). *Comments on a Plan for the Study of Entrepreneurship*, (八木紀一郎監訳、溝端剛・杭田俊之・林康司・江頭進訳「企業家精神の研究のためのプランへの論評」『資本主義は生き延びるのか』、2001年)。
- [9] Smith, A. (1759). *The Theory of Moral Sentiments*. (高哲夫訳『道徳感情論』講談社学術文庫、2013)。
- [10] Tarde, G. (1890, 1895) *Les lois de l'imitation : étude sociologique*. Paris, France. Félix Alcan. (池田祥英、村澤真保呂訳『模倣の法則[新装版]』河出書房、2007年)。
- [11] Wallerstein, E. (1991). *Unthinking Social Science: The Limits of 19<sup>th</sup> century paradigm*. Philadelphia, PA. Temple University Press.
- [12] オックスフォード科学辞典、朝倉書店(2017)。